

## 初等中等教育資料 7月号① 「子どもに学んだあの風景」より

### 『子どもの心の声とともに学ぶ』

調布市立調和小学校長 山中 ともえ

頭の中からあふれちやうよ！

向かい合って個別指導をしていたときのこと、必死の形相で漢字を覚えようとしていたA君は、急に目に涙をいっぱいためて、「先生、頭の中からあふれちやうよ！ こんなにがんばっているのに、先生の教え方が悪いんだ！」と叫びました。私はなかなか漢字を覚えられないことについて、まじめに努力すれば何とかなる、量をこなす工夫をすればよいと考えていました。

その当時は、発達障害という言葉が今ほど一般的ではなく、通級指導を担当していた私は、A君には聴覚障害に対する指導をしていましたが、発達障害の観点からとらえてはいませんでした。今考えると、A君の認知の状態では、皆と同じやり方で漢字を覚えることが相当つらかったと思います。

そのときの言葉は、私にとって大きなショックでした。A君のもっている少ない語彙の中から「頭からあふれる」という実感を伴った表現、「教え方が悪い」という正面切ったの訴え…。指導することに多少の経験を積み、余裕をもち始めていた私は、何も返す言葉がありませんでした。

その後、頭から漢字があふれないように、A君なりの漢字の覚え方と一緒に模索していきました。少し人とは違う覚え方を習得した後は、ずいぶん多くの漢字を覚え、語彙を増やし、自信を付けていきました。成長して大人になったA君と、このときの苦労を今ではにこやかに語っています。

#### 一人一人が輝くために

そのとき、A君に言われたことが、私の考えを変えていきました。子どもによっては、学習面でも生活面でも、皆と同じ方法ではつまずきを超えられない場合があります。その際、皆と同じ方法で超えようとするのではなく、その子どもなりの方法を身に付けることが大切です。

子どもたちの様子は、障害という診断が有る無しにかかわらず、一人一人実に様々です。しかし、特別支援教育が推進されている今、教師はつまずく子どもの声を聞き、個別に配慮を考えています。本校の職員室でも、放課後や休み時間に、担任が学年主任や特別支援教育コーディネーターとつまずきに対してどう配慮しようか、日常的に相談しています。

つまずきを見せる子どもは、言葉による表現が苦手な場合もあります。言葉ばかりでなく、言葉にならない表現もキャッチし、一人一人が輝いて学校生活を送るために、今日も心のアンテナを巡らせます。

(やまなか・ともえ)

## 初等中等教育資料 7月号② 「フロントライン教育研究」より

### 『絵本の教材化の可能性』 ～その1～

鳴門教育大学大学院教授 余郷 裕次

#### [1] なぜ読み聞かせが大切か

ジム・トレリースは、その著『読み聞かせ この素晴らしい世界』の改訂版の出版に当たり「序・いまなぜ『読み聞かせ』なのか」の扉の裏に、次のことばを置いている。

もしも世の親たちが、学齢期のわが子に1日に15分、本の読み聞かせをするようになれば、学校に革命を起こすことができるでしょう。(シカゴ市教育長ルース・ラブ 1981年) (亀井よしテ訳『読み聞かせ この素晴らしい世界』1987年 高文研12頁)

ここには、我が子への本の読み聞かせによって、子どもたちをよりよく変革する可能性があることが示唆されている。

現在、子どもたちが読書や学習から逃走している状況を、全て学齢前における保護者による読み聞かせの不足の責任に帰すことは、簡単である。しかし、誰かに責任を転嫁しても、子どもたちに豊かな学力を保障することはできない。

今こそ、教師は、学習を改革することによって、目の前の子どもに対し、プロとしての責任を果たすべきである。ジム・トレリースは、従来の学習を次のように批判している。

われわれが、子供に読み書きを教えるためにぼう大な費用と時間を注ぎ込んでいるにもかかわらず、その子供たちが読まないことを選ぶのだとしたら、何かがまちだっているのだと結論するほかないであろう。われわれは子供たちに、いかに読むかを教えることばかりに熱中し、彼らに読みたいという気持ちを教えるのを忘れてしまったのである。(同上書45頁)

「いかに読むか」・「読みたい」を、「いかに学ぶか」・「学びたい」に置き換えて読むこともできよう。ジム・トレリースは、自己の経験、様々なデータや実践事例を引きながら、読み聞かせの必要性を訴えている。

あなたがクラスの子供たちに本を読む時間をさいたからといって、カリキュラムをおろそかにしたことはない。読むことは、カリキュラムである。すべての学習と教授の第一要素は、言語である。言語は、授業を伝達する道具であるだけでなく、生徒が私たちに返してくれる成果そのものである—そのことばが算数の言語であれ、理科の言語であれ、あるいは歴史の言語であれ、同じである。その意味で、読み聞かせをする教師は、子供たちがよりよい聞き手になることを通して、より高い言語技能を発達させる手助けをしているといえる。他人の言葉を聞けば聞くほど、話したり書いたりすることによって自分自身の言葉を他人と共有したいという子供たちの欲求は強くなる。

また、フランスで中学校、高校の教師経験のあるダニエル・ペナックは、その著書『奔放な読書』(浜名優美・木村宣子・浜名エレヌ訳 1993年 藤原書店)の中で、高校生を読みたい気持ちにさせる方法として、朗読(読み聞かせ)を提唱している。

一番大事なことは、先生がすべてを朗読してくれるということでした！ わたしたちが理解したいという気持ちに先生がただちに与えてくれたあの信頼感…声に出して朗読する人間は、わたしたちを本の高さに引き上げます。その人は読むべき物をほんとうに提供するのです。

(道標 478号に続く)

## 初等中等教育資料 7月号③ 「フロントライン教育研究」より

### 『絵本の教材化の可能性』～その2～

日本でも、読み聞かせが様々な効果をあげている実践例は多い。私も読書、ひいては学習を改革するために、読み聞かせの導入が欠かせないと考えている。中でも、私は絵本とその読み聞かせの効果を喧伝したい。

#### [2] なぜ絵本の読み聞かせが大切か

ジム・トレリスは絵本の読み聞かせについて次のように述べている。

教師や親からよく訊かれることの1つに、「いつ絵本をやめて、“分厚い”本—小説を読み聞かせ始めますか？」という質問がある。／子供を一刻も早く大人にしたいという親の気持ちはわかるが、そういうふうな言い方をされるたびに、私は思わずたじろいでしまう。／その理由の第一は、「絵本をやめるとき」などはないということである。私の知り合いには保育園児にジュディス・ビオーストの『アレクサンダーのこわくて、みじめで、いいことがひとつもなく、とてもいやな一日』を読んでやっている教師もいるし、同じ本を年に2回、年度始めの9月と、生徒からの要求により、学年末の6月にもう一度—読んでやっている高校2年担任の国語の先生もいる。／15歳にもなった高校2年生がこのような絵本を読んでもらうのはおかしいことだろうか？ 私にいわせれば、そんなことはない。私は大人のグループに講演するときには、いつも絵本（『アイラのおとまり』）を読むことにしているが、それに異論を唱えた人は1人もいない。それどころか、ひよっとしたらその時間が、私の講演の一番すばらしいときではないかとさえ思っている。よい物語は、よい物語である。美しく感動的な絵は、五歳児の心も15歳の少年少女の心も同じように揺さぶるものである。絵本は小学校から高校までのすべてのクラスの読み聞かせリストに加えるべきである。

(前掲『読み聞かせ この素晴らしい世界』 139～140頁)

本稿では、読み聞かせでも、一般にはまだ幼児期のものと受け取られがちな絵本の読み聞かせが、なぜ学校教育段階の学習者の読書意欲や学習意欲の増進につながるののについて追求したい。

#### [3] 絵本の読み聞かせの効果

絵本の読み聞かせが脳を活性化し、脳の発達により影響を及ぼすことについては、従来経験的に指摘されてきた。近年、絵本とその読み聞かせの効果について、脳科学の面からもそれを裏付ける研究が展開されている。

絵本とその読み聞かせが、脳の発達により影響を及ぼす要因は、次に示す①～⑩の「心地よさ」の効果によるところが大きいと思われる。

- ①まるい大きな正面顔 (ベビーシエマ) の効果
- ②母親語 (Motherese) の高い声と抑揚の誇張と繰り返しの効果
- ③まるい大きな正面顔 (右脳刺激) と母親語 (左脳刺激) の同時刺激の効果
- ④読み手と聞き手による視覚的共同注視の効果
- ⑤画面構成による効果
- ⑥色彩 (赤→青→緑→黄) 知覚の効果
- ⑦味覚や睡眠のイメージによる効果
- ⑧スキンシップ (attachment) の効果
- ⑨呼吸のシンクロ (呼吸の引き込み) の効果
- ⑩絵本モニタージュ (残像) の効果

これら絵本とその読み聞かせによる効果は、実は、乳児期の養育体験 (養育者に愛された体験) に基づくものと考えている。とりわけ、授乳がこれらの「心地よさ」の体験を醸成したと推論している。絵本とそめ読み聞かせは、授乳と類似の刺激を形成することによって、子どもの脳の発達にとって、よい刺激を与え、読書や学習への欲望を育てることができると考える。

(続きは、7月号をご覧ください)